2024年12月7日

人権ネットワーク八幡　NEWS

事務局　〒523－0857　近江八幡市八幡町170（旧八幡教育集会所内）
電話　【携帯】　080－2525－7114(高坂)
【メール】　Tko.koj1224@yahoo.co.jp

12月10日は世界人権デー（HUMAN RIGHTS DAY）

侵略・戦争・独裁・差別など大きな不安要因が増える現在、「人権尊重」「民主主義」「平和」「自由」といった多くの市民が望む願いは、どこかに置き忘れられているのでしょうか。

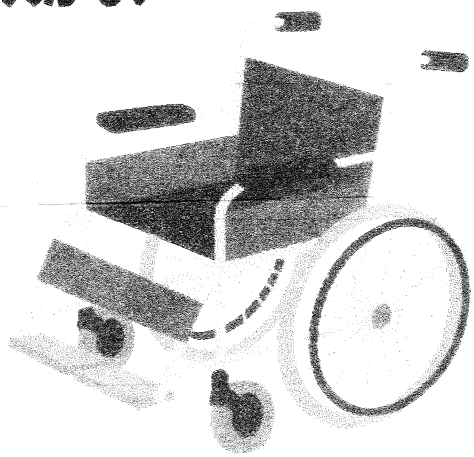
1948年、国連で世界人権宣言が採択された日を記念して、この日が設けられました。日本では12月4日から10日までの1週間を「人権週間」としてイベントや教育現場での取り組みなどが行われます。

世界人権宣言は先の第2次世界大戦を、人類史上、最悪の人権侵害であるという多くの国々の反省から生まれたものです、二度と同じ過ちを犯さないという宣言だったのですが…。

滋賀県でもこの週間に合わせて「人権尊重と部落解放をめざす県民のつどい」が12月8日（日）に米原市の文化産業交流会館で開催されます。今回は戦場カメラマンとして著名な渡部陽一さんの、「世界からのメッセージ～希望ある明日のために～」と題した記念講演が行われる予定です。参加費は無料ですので、興味のある方は是非。

＊　2024年の本紙は今号が最終となります。来年もおつきあいのほど、よろしくお願いします。

所外雑記　～　車イスがない　～



11月の土曜日、居酒屋「参代芽」では、マスターのマーチンがスマホで市役所の夜勤の職員に大きな声でよぼっている。

「何で車イスが借りられへんねん、担当者とかわれよ～」

こちらでも、スマホで太田さんがレンタルの車イスが借りられないか調べている、しかし「休日」でムリや。

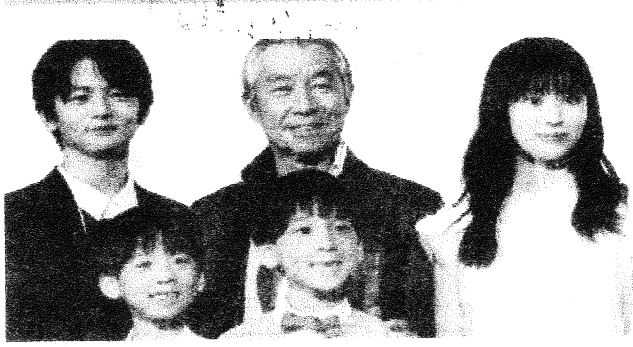
私も知り合いの先生にtelを入れて、何とか車イスが借りられないか手配したが、結局、車イス1台がどうしても借りることができない。

何故、こんな騒ぎになったのかと言うと、東京からこの日、中央大学の池田賢市教授と研究員のTさんが、清原さんと一緒に本会事務局に来られ、マリアナさんの取材をされたのである。その取材後、宿泊先の駐車場前にある深い溝にTさんが落ちて、左足を骨折するという事態になったのである。

結局、翌日マリアナさんが近所で借りた手押し車で、何とかTさんの移動が可能になり、ホテルで連泊し、月曜日に改めて市内の総合医療センターで診察を受けることになった。その診察に際しては、2人目の取材予定であったマリアナさんの小学校時代の担任マキコさんが大活躍された。マキコさんはTさんに付き添い、半日係りでTさんお迎えの人が米原駅に来るまでてきぱきと「介助」されていた。

ほんまに、ありがとさん。マキコさん、助かったわ。　（TK）

イオンシネマへ行こう　「室井慎次　生き続ける者」（2024年日本映画）



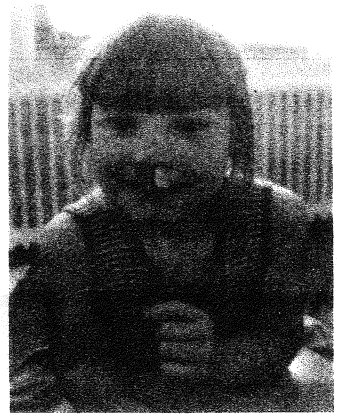
柳葉敏郎演じる室井慎次の物語の続編（前編も）が上映中です。ネット上の映画評では酷評の書き込みも見られますが、客足の方は好調の様です。

前にも書きましたが、これは家庭を持たなかった元キャリア官僚の室井慎次が家族を築き、家族を守る物語です。家族とは「血が繋がっているから」「同じ家に住んでいるから」だけではダメで、家族になるためにはお互いに努力が必要なんだと映画は訴えています。ピント外れの様な酷評は横に置いておいて、私はこの作品を楽しめました。

映画の最後には緑のミリタリーコートを着た青島刑事も登場し（ネタバレ?）、次回作への期待を繋いでくれています。「踊るシリーズ」と共に生きてきた身としては次も楽しみです。　（水来亭平助）

海外よもやま話㊲　「Weite Reise macht weise.」～広い世界を旅するほどに…～

風の吹くまま気の向くまま、明日の宿は明日決める、海外放浪一人旅。今日は4か月過ごした僕の大好きな国、ドイツのお話。



ドイツ人の友達と車でお出かけした時のこと、
僕「えー！？止まらんでいいの！？危ないやん」
友「大丈夫やん。カンカンカン鳴ってへんねんから」
僕「日本やったら鳴ってなくても止まらなあかんねんで」
友「なんで？意味なくない？」
僕「だって遮断器壊れてて電車来るかもしれんやん。」
友「じゃあ日本は青信号でも信号壊れてるかもしれへんから止まらなあかんの？」
僕「いや、それは止まらんでいい」
友「じゃあ、踏切も止まらんでいいやん」
僕「たしかに・・・」

この会話は初めてドイツに行った時なのでもう20年前のことです。でも未だに友達に言い返す言葉が見つかりません。

合理的で議論好きでやると決めたらやる。ゴミの分別、脱原発、移民受け入れ、決断力と実行力。高速道路の速度制限はないから180kmとかでガンガンとばすけど、信号のない横断歩道を渡ろうと立ってたらほぼ100%車は止まってくれる。。

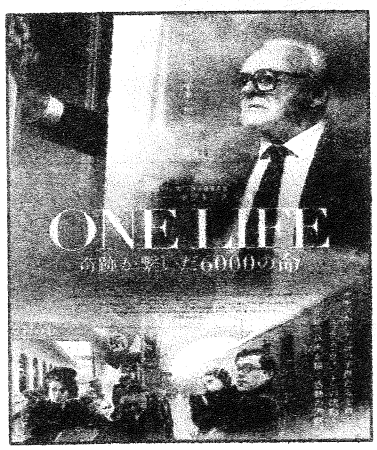
先月、久しぶりに一停無視でネズミ捕りにひかかりました。7000円です。でもいいんです！僕はドイツが好きなので。僕は旅をして賢くなったので笑。

(K.Kisuke)

＊「Weite Reise macht weise.」は「広い世界を旅するほどに、人は賢くなる」という意味のドイツのことわざです。

人権映画見て歩記　file 109

英国映画『ONE LIFE/奇跡が繋いだ6000の命』を紹介します。



英国人ニコラス・ウィンストンは、困っている人を見るとじっとしていられない性格です。ナチスドイツの迫害によって多くのユダヤ難民がチェコスロバキアに避難したニュースを知ると、すぐさまチェコに駆け付けました。そこで彼が見たのは、狭くて不衛生な場所で暮らすユダヤ人たちの姿でした。せめて子どもだけでも英国に逃がしたいと考えたニコラスは、そのことを現地の難民救済事業団に提案します。誰もが無理だと言いましたが、「無理だと思ったらそこで何もできなくなる。僕も含めた普通の人たちがその気になって団結したらきっとできる！」と訴え続けたのです。彼の情熱に共感した人たちは、事業団内に児童部を設立しました。移住計画遂行のためチェコにとどまったニコラスは、英国にいる母親に助けを求め、ユダヤの子どもたちが英国に移住するために必要なことを調べてもらいました。

友人の協力によって、英国で寄付金と里親を集めることに成功しました。こうして最初の20人が英国に向けて出発し、移住は見事に実現しました。自信を持ったニコラスたちは、次々と移住団を送り込みましたが、最後にして最大の移住団がチェコを出発しようとした時、ナチスがポーランドに侵攻し第二次大戦が勃発。移住団は英国に行くことができませんでした。こうしてニコラスの移住計画は、699人の子どもを移住させたところで終了となったのです。

やがて終戦を迎えます。ニコラスは助けられなかった子どもたちがたくさんいたことで自分を責め続けました。そして彼は戦後も様々な慈善活動を続けたのでした。時は流れ1987年。高齢となったニコラスは、古い資料の中から移住計画資料を見つけます。後世に役立てたいと考えたニコラスは、資料の活用を各方面に打診した結果、メディア王が知ることになります。そして思わぬサプライズがニコラスに訪れるのです。

『シンドラーのリスト』の感動再び！大戦当時のニコラスたちの活動が、綿密な調査にもとづきドラマチックに再現されます。高齢のニコラスを名優アンソニー・ホプキンスが貫録で演じ、ここにまたひとつ、知られざる史実が見事な映画となって世に出たのです。

(見て書いた人…渡邊幸平)